

学 友

「蓮長殿、このようなことを伺うのは、ちと恥かしいことですが、きかしては下さいますまいか」

こう訊いたのは浄念という学僧であった。俊範上人の講義が終つての帰り路である。

「私は朝夕の勤行に近頃一こう熱がはいらんで困つておるのですよ」

「ほう、それは坊主としては大変なことですね、武士で言えば君に忠義が出来ませんと言うのと同じことですから。いや、ゆつくり訊かせて貰いましょう」

質問を面白く感じたか蓮長は「あれに腰かけましょう」と山路のかたわらの小さな岩を指さした。

岩に腰かけると、よく晴れた陽差しに琵琶湖が一目にみえる。坂本の宿は足許にみえるが伊吹山の麓に迫る大湖の対岸は、空に浮かんでおるのではないかと疑がわれる程であった。

「経文の意味もわからず、ただお経をあげておる時は、なんとも思いませんでしたが、少し意味

がわかりかけたと思ったら却って疑問が出てきたのです。一つ解決していただきたいのです。こんなことは、俊範上人なぞにきけませんよ、頭からこなされてしまいますから」

「で、田舎坊主の蓮長ならばという所ですか」

蓮長は微笑を浮かべていた。

「とんでもない、拙僧は真面目なつもりでおるんですから。実は、何時でしたか中堂で読経をしておった時、ふつと、頭に浮かんできたのです。根本中堂の御本尊は吾が叡山の開山伝教大師御自作の薬師如来です。御本尊には毛頭不足はない、有難いものですが、それに対して南無阿弥陀仏と唱えるのは如何なものでしょうか。御本尊と口に唱える所とが一致しておらないで果して御利益が成ぜられましょうか。つまり質問ですが」

「つまらない質問ではありませんぞ、恐らくこれを解決したら、全仏教の解決が出てくるかもわかりません」

「そうですか、そういわれると嬉しいですよ。実はそこに考えついて、あたりを見廻わすと不思議なことばかりです。わが天台宗では法華経に説く所の観音さまを大変ありがたりますが、その観音さまを拜むのに南無阿弥陀仏と唱えておがんでおります。これなぞもおかしな話だと思えます。わが宗ばかりではありません。禅宗ではお釈迦さまを祭つて南無阿弥陀仏と唱えておる。いずれの宗旨もみんな本尊と称名とが全く違つております。これはまちがっておるのではな

いでしようか。どうしてまた、こんなことが平気で行われておるのでしようか」

「それは一言にして尽せば本尊を主として考えないで自分の心を主として考えるからそういう過ちがあるのではないでしようか」

「もつとやさしくいって下さ」

「救ってくれる仏を中心にして、ものを考えず、救われる自分の気持のみにとらわれるから、そういう間違いが平気で行われているのですよ。禪家はその極端な例です。見性成仏で、自分の心に仏を見出し、自分が成仏するというたてまえをとりますから、おがむ本尊はお釈迦さまであるうと下駄の歯であるうと一向にさしつかえがない。本尊も經典も悟る迄の手段ということになつて絶対これではつきればいけないぞと強要しないのですから、これなどは徹底していますから悪い所も善い所もはつきりしていて却つてよくわかりますが、最も仕末の悪いのは、仏法の道理を転倒させておるのがあります。これが一番いけない。即ち阿弥陀仏が、この世の中にお釈迦様と生れてきて、一切のお経を説いたのであるというんですから、とんでもない人騒がせの話です。馬をみて鹿という方がまだよい位です。仏の経文の何処をたずねてもそのようなことのないのは、御自分の弥陀三部経を読んだつてわかる筈です」

「なる程、そういうものですか、では、どういう訳でそんな説が流行したり、間違いが出てきたのでしょうか」

「それには、いろいろの原因がありますが、先づ最初にあげねばならんのは、日本の仏教のひろまり方についての大きな疑問です。

さて、私の説いた教は經典として日本へ全部渡つてきておる即ち一切經です。これ以外には私の教えはないことはわかつております。經典は死物ではありません。經卷のある処に仏は生きております。日本にも釈尊が現に来ておられて、われわれが經典をひもとく時、そこにわれわれに向つて説法をきかせてくれておるのです。この私の説法を求めてわれわれはきかねばなりません。しかるにこの説法に耳をふさいで、今流行しておる宗旨はなんだろうと、東奔西走しておるのが僧侶ではないでしょうか。仏教のため万里の波濤を渡つて支那へ行く、その求法心は認めますが、支那に行つたとて、日本にある一切經と異なつた一切經がおる訳ではありません。入唐求法という言葉がありますが、求法とは一体どんなことでしたか、支那に行つたら真言が流行しておつたから日本へ真言を伝えた。念仏が盛んであつたからそれを和国へ招来した。その次に出掛けて行つたら真言も念仏もすたれて禪宗が一大流行であつたから、これこれとばかり喜んで日本へ持ち帰つてきた。これが従来日本へ仏教が流行した原因です。果してそれでよいのでしょうか。私の説に耳をふさいで、人師論師の説をきいてそれを仏説なりと興行する。これこそ大きな過ちの根本です。

支那の或る人などは三七日断食をして、満願の日に経藏にふらつく足で這入り込み、盲ら滅法

にお経をつかみ出してきて、これが仏の正意なりとして一宗を開いた人があるくらいです」

「本当ですか」

「本当ですとも、つかみ出したお経が弥陀の三部経だったので、大いにそれから念仏を流行させたのです」

「ふむ……それで宗旨が開けるのならば、まだまだ宗旨の数は少くない位ですなあ、八万の法蔵という位ですから、八万の宗旨があつてもよい訳ですねえ、それでは、まだまだ坊主が足りませんよ、一人一宗ですか」

「兩人とも思わず叡山の木立をゆるがす程の哄笑を続けるのだった。

